

知的障害者が豊かに生きるための学び

自立を学びあう

生涯学習講座



誰でもできる講義
の進め方と支援
のポイントを紹介

すぐに使える生活
に役立つ8つの
講座テキスト

生活に役立つ知識と技術を学ぶ講座テキスト

☆編者 草羽俊之 ☆発行 NPO 法人 エス・アイ・エヌ

【目次】

はじめに

第1章 知的障害者の自立と生涯学習

1 自立を支える学び

- (1) 知的障害者の学びの場の現状
- (2) 広島における学びの場の取り組み
- (3) それぞれの取り組みを教訓にして

2 当事者アンケートによる学習ニーズ

第2章 生涯学習講座の実践

1 講座の計画と内容

- (1) 講座の概要
- (2) 講座の計画と内容

2 各講座の実践

第3章 各講座の実践から学んだこと

1 参加者の学びへの思いと姿

- (1) 学びを生かす相談支援の大切さ
- (2) 学びへの期待と希望
- (3) 学びから学び合いへ
- (4) 自分の生活を築くために
- (5) 学びの場から潤いの場が変わるとき

2 講座を発展させるために

第4章 生涯学習を地域で実現するために

1 全国で多様な広がりを見せる学びの場

- (1) 知的障害者のオープンカレッジの取り組み
- (2) 障害者自立支援法の福祉制度を活用した学びの場

2 生涯学習講座の実践を地域で広げるために

- (1) 生涯学習講座のプログラムを活用した取り組み
- (2) 広島で生涯学習の場をつくる

第5章 まとめ

1 生涯学習の意義

- (1) 自分らしく豊かに生きるために
- (2) 生涯学習で大切にしたい4つの視点

2 まとめ

- (1) 生活に根ざした学びへの期待
- (2) 自立と生涯学習

【資料】

『テキストと支援の手引き』
～生活に役立つ知識と技術を学ぶ講座～

- (1)「コンピューターの使い方」
- (2)「自分の暮らしに生かす福祉制度」
- (3)「余暇活動を楽しもう」
- (4)「ビジネスマナー」
- (5)「食と栄養」
- (6)「経済生活について」
- (7)「健康と医療」
- (8)「自立をしたい」

おわりに

「エス・アイ・エヌが目指すこと」

エス・アイ・エヌ 理事長 久保 正道

はじめに

知的障害者の多くは、特別支援学校高等部を卒業して、さまざまな進路先へ移行していきます。しかし卒業後は、現代社会で起きるさまざまな変化に対応する職業技術や生活技術の獲得が求められています。しかし一方では、それらを使いこなす力を身につける場や、生活を豊かにする文化に触れる機会も、現状ではほとんどありません。

私は、知的障害者が自立をしていくために、卒業後のさまざまな社会参加や生活の中での機会をとらえ、その時に必要な力を身につけていくことが大切であると考えています。

知的障害者の生涯学習については、新障害者基本計画の中で「社会的・職業的自立を促進するために後期中等教育・高等教育における就学を支援するとともに学校卒業後の就労、生涯学習等を推進する」と述べています。

また、国連の障害者権利条約では、生涯学習における合理的配慮の確保が述べられています。このように国際的な動きの中では、知的障害者における生涯学習の保障を進めようとする動きが見られますが、日本では具体的な施策として展開されているものではありません。

知的障害者が自立した生活をしていくためには、常にさまざまなりテラシーを身につけていくことが求められています。そして、自立を目指す意欲を損なわないように、社会生活に必要な知識やスキルを高めていくためには、生涯にわたる学習とその支援の環境をつくることが課題であると考えています。

「特定非営利活動法人 エス・アイ・エヌ」（以下、エス・アイ・エヌ）は、知的障害者の学びの場としての生涯学習講座の実施に取り組みました。この事業は、広島市の地域活動支援センター事業の活用による生涯学習の拠点づくりと、体系の普遍化に向けたモデル事業の実践及び研究を目標にしています。

この実践を通して、生涯学習による「自分らしく豊かに生きる」ことをめざした学習プログラム（講座）の開発と、広島市における現行法制度を活用した事業化の方策を明らかにしたいと考えています。

この冊子は、生涯学習の取り組みで行った講座の実践を基に、講座の構成と内容、そして各講座の講師による講義の進め方や展開、及び資料の活用方法などについて解説しています。知的障害者が地域で自立するための支援ツールの一つとして、実践の一助となれば幸いです。

今後、このような取り組みが、いろいろな地域や施設・団体でひろがっていくことを願っています。

事業化するにあたり、独立行政法人福祉医療機構から平成23年度社会福祉振興助成事業の助成金を受け、開設に至ることができました。この場を借りて御礼を申し上げます。

広島市立広島特別支援学校 草羽 俊之

第1章 知的障害者の自立と生涯学習

1 自立を支える学び

(1) 知的障害者の学びの場の現状

現在、福祉の現場から、知的障害者の自立に向けた学習を支援する場の設立と実践が始まっています。知的障害者が豊かに生きるための生涯学習の取り組みについての試みです。具体的には、障害者自立支援法の自立訓練事業（生活訓練）を活用して、特別支援学校の卒業生や、地域生活への移行をめざす人を対象にした学習活動や体験学習を軸とした青年期教育の取り組みです。

また、知的障害者の大学におけるオープンカレッジの取り組みなどもあります。オープンカレッジは、特別支援学校などの卒業生のニーズに対応できる生涯学習の場として、大学公開講座のなかで取り組まれている活動です。

それぞれの事業の活動内容は、「生活」「労働」「余暇」「マナー・人間関係（人付き合い）」「自己理解」などの学習に軸を置いたものから、「文化」「スポーツ」「レクリエーション」などの楽しみや余暇活動に目を向けたものまでさまざまです。

しかし、このような取り組みは、全国各地域に十分に環境整備されているとはいえ、知的障害者にとって、学校卒業後の文化・教養を学ぶ場づくりは始まったばかりという現状にあります。

(2) 広島における学びの場の取り組み

「エス・アイ・エヌ」は、知的障害者の就労自立を目標にしたヘルパー資格の取得に向けて2004年6月に「3級ホームヘルパー養成研修講座」を開設しました。

また、同年10月に広島では初めての試みとなる知的障害者を対象とした「レッツ・オープンカレッジIN広島国際大学」を開催しました。講座内容は、法律や制度を自分の暮らしに役立てて使えるようになる「学びの講座」と、暮らしを豊かに楽しくする「レッツ・エンジョイ・カルチャー講座」でした。

しかし、残念ながら継続的な取り組みにつなげることができませんでした。

(3) これまでの取り組みを教訓にして

軽度の知的障害者の中には、パソコンを使うことやバイク・車の免許取得を希望している人が多く、適切な支援を得てその希望を実現している人もいます。

しかし、障害が見えにくいと言われる軽度知的障害の場合は、本人たちから見た社会や生活の分かりにくさ、不都合、不便さが実社会に数多く隠されているのが現状です。一方、現代社会は、障害の有る無しにかかわらず、はんらんする情報の要不要や真偽を見分け、それを使いこなしていく、

いわゆる情報リテラシーが求められる時代になっています。

つまり、地域で豊かな自立生活を築いていく上で、知的障害者から見た問題を少しでも解決し、知識・教養・生活技術などを向上させる機会としての生涯学習の場は重要となります。そのことは、自己選択や自己決定の質を高め、本人の夢や希望の実現に向けた主体的な生き方へとつながります。

一方、本人の自立への意欲が損なわれないような社会的な支援や、公的な保障も重要であることは当然のことと言えます。

2 当事者アンケートによる学習ニーズ

筆者は、2010年に「生涯学習に関する当事者アンケート」（対象は、文字や言葉でのコミュニケーションによる理解が可能な100人の知的障害者）を実施しました。アンケートは、本人の「困り事や心配事」についての調査から導き出した学習ニーズの反映によるプログラム化を目的にしています。

アンケート調査や個々の聞き取りの分析を通して、困り事や心配事から本人の意識や思考が多様に働いて学習ニーズに結びついていることが分かりました。その動機や目的に着目して分類した型（スタイル）は次の通りです。

(1)『キャリア・スキルアップ型の学習ニーズ』としては、「就職活動」「日常生活スキルの獲得」「職場内での人との関係の作り方」の学習による「家族との生活から自立生活への移行」「作業所・施設からの企業への就労移行」「安定した継続就労（対人スキルの獲得）」などの実現や課題を克服するためのものです。

(2)『潜在型の学習ニーズ』としては、「異性との付き合い」「資格取得」「漢字や計算」などの学習による、個々の内心部分の潜在的なニーズに着目しました。表面には出にくく、内なる思いと言ってもよいデリケートな部分です。障害者の特性や性に関する問題は、本人の経験や生育歴（学校歴）などとの関係があり、個々のさまざまな体験にも配慮した丁寧な支援が必要です。

(3)『転ばぬ先のつえ型の学習ニーズ』としては、「災害について」「健康」「消費者被害」の三つです。「今すぐには必要はないが、準備をしておきたい」「先に備えておきたい」といった学習ニーズです。行政や保健・医療機関との連携で、より効果的な学習と支援につなげる可能性があります。特に40歳以上の中高年を対象にするときは、大切な内容となるでしょう。

(4)『権利意識型の学習ニーズ』としては、「福祉・就労制度」「金銭管理」の学習により、「自分に関係することを覚えておきたい」「自分のことは自分で決めたい」とする権利意識の基礎をつくる学習です。「福祉サービスの利用」「お金の使い方」「就職活動」の学習につながっていくものと考え

ます。

(5)『個々の困り事解決型の学習ニーズ』としては、「人間関係」「福祉サービスの利用」「お金の使い方」「交通機関の利用」があります。それぞれのテーマの一般的な学習から、実際の個人の困り事や知りたい内容により、障害者福祉サービスや就労支援などの障害者雇用支援策を活用し、解決の方法へとアプローチをしていくことが求められます。

(6)『家族・支援者の提案型の学習ニーズ』としては、「食生活」「外出時のマナー」「文化・教養」の学習です。本人の気がつかないところで、他者から見て「知っておいてほしいこと」「身につけておいた方がよいこと」等の観点で、本人にお勧めしたい学習内容です。

また「文化・教養」の学習も、本人の視野や知識を広げることで、新たなレベルの自己決定や自立観を培う土壌となると考えます。

以上の6つの型による学習スタイルは、それぞれに目的や特徴があります。しかし、それぞれが独立をしているのではなく、相互に関連をしながら自己実現の支援につながっていくものと考えます。本人たちの意識と思考は学習を通して、次への学びの意欲や主体性をはぐくみ、人格的な自立にもつながっていくと考えます。

今回の講座の学習プログラムも、この型を活用し計画しました。

第2章 生涯学習講座の実践

1 講座の構成

この講座では、第1章の2で述べた本人の「困り事や心配事」についてのニーズ調査から導き出した生涯学習ニーズの6つの型を参考に、次の5点に視点を当てた生涯学習講座の内容で構成をしました。

- (1) 労働や生活場面での実務的なつますきに対する技術・学習支援。
- (2) 文化・教養・趣味など個人のニーズに応じた生きがい支援。
- (3) 自分を取り巻く社会の情勢や制度・法律・防災・安全の知識や理解、そして障害者の権利と人権についての意識づくりと活用方法の理解。
- (4) 社会的教養と暮らしのルールや住民自治の理解などの学習や具体的な技術習得。
- (5) 「障害」「自立」「生き方」「自分らしさ」などをテーマに当事者同士のピアカウンセリングの場づくり。

2 講座の概要

講座の計画と内容を考える際に、配列及び関連性と支援者の専門性を考慮に入れました。

第1回の講座は、「コンピューターの使い方」から始めました。その理由は、後続の講座でインターネットを活用し、情報の収集をして講義や演習に活用をするためです。また、コンピューターの使用に経験の有無や差があるため、インターネットの活用に焦点を置いた内容で行いました。

第2回の「自分の暮らしに生かす福祉制度」の講座では、実際に相談支援をしている相談員が講師となり、本人との相談内容を基にした支援計画の作成を行いました。この講座は、権利としての福祉制度の講義と、演習による制度の活用や具体的な困り事の問題解決に役立つ講座です。

第3回の「余暇活動を楽しもう」講座では、限られた範囲内で仲間と一緒に楽しむために、学生ボランティアと共に集団で話し合いながら余暇活動の計画を立てる講座です。

第4回の「ビジネスマナー」では、会社や外出先などで必要なマナーについて、「どうして必要なのか」「なぜ大切なのか」を学びます。会社などの新人社員研修の講師による、社会人としてのキャリアやスキルのアップに役立つ講座です。

第5回の「食と栄養」では、生活の中で活用・応用・工夫できる「食のチェック」や「バランスのよい弁当の買い方」「簡単レシピの紹介」など、食生活の見直しワンポイントレッスンを受けます。知っておくと便利な講座です。

第6回の「経済生活について」では、家計簿の作成による金銭管理と悪質商法などに対する知識と対策についての法・制度の活用方法を学びます。自分を守るために活用できる制度や、知っておくと未然に防ぐ手立てを知る講座です。

第7回の「健康と医療」では、自分で簡単にできる健康状態の把握や健康管理の方法について学びます。この講座も、自分の体を守るために活用できる制度や、知っておけば未然に防ぐ手立てを知る講座です。

第8回の「自立について」では、これまでの講座を通して自分の将来の夢や希望を実現するために仲間と一緒に考える場です。生き方や未来を創造する場とも言えます。

以上の講義では、必ず演習の時間をつくり、小集団の話し合いや参加者同士のロールプレイも行いました。また、ワークシートやチェックリストにより、自分を把握する方法も取り入れました。

第3章 各講座の実践から学んだこと

1 参加者の学びへの思いと姿

(1) 学びを生かす相談支援の大切さ

この講座の参加者は、それぞれのさまざまな思いをもって臨んでいました。

「障害者の福祉制度」の演習で、Yさんは、「一人暮らし」をかなえるた

めの支援を望んでいました。

一人暮らしを実現化させるためには、アパートを借りるための手続きや、家賃や敷金、そして引っ越し費用のお金が必要です。それらのお金の工面について、どうすればいいか悩んでいました。

また、生活費用を、給料で賄えるかどうか不安を感じていました。しかし、サービス利用計画の作成を通して、現在の自分の状況で何ができて、何ができないかを知ることができました。相談支援の専門家の講師と協力して、サービス利用計画を立てることができて、これから自分の希望を実現するために自分が取り組むべき課題が明確になりました。また、見通しをもつこともできました。悩みや不安から夢の実現への一歩になっていくことができたのです。講座修了後も講師への相談は続いていました。

このように、知的障害者にとって夢や希望を実現するためには、本人自身のスキルやキャリアの獲得も必要ですが、実現に向けた過程での困り事や心配事を、共に問題解決してくれる支援者も欠かせません。

講座による学びを生かすための良き相談者と、その支援を受けることができる体制が必要だと感じました。

(2) 学びへの期待と希望

Wさんは、家族を亡くし、現在はグループホームで暮らしています。いろいろな環境の変化もあり、真面目なWさんは、自分の思いをうまく伝えることができないことで、人間関係に苦しんでいました。

第1回のパソコン講座に参加したWさんは、「初めて、パソコンを使った」と言っていました。Wさんは、指先に震えがあるために文字を書くことが苦手でしたが、自分の思いを文章に託し、誰かに読んでもらいたいと思っています。会話だと気遣いが多いが、文章ならばばかることなく表現できると思ったからです。

パソコン講座の時に、隣の席で巧みに操作する仲間の姿を見て、自分でもできるようになればいいなと思ったようです。パソコンのキーボードの大きさなら、少しずつでも日記を書くことができるのではないかと思います。ボランティアさんに相談をすると、ガード付きキーボードなら震えがあっても大丈夫と助言をもらい、ますますパソコン操作への期待と可能性をもちました。

パソコンを操作できる知的障害者は増えています。しかし、まったく縁のない人もいます。学ぶ機会とパソコンがないと一人で始めることはできません。その人に合わせた指導や支援の方法も必要です。学校卒業後の学びへの欲求は、自らの生活や仕事に裏打ちされた願いや必要性の強さによるものだと思います。つまり、Wさんにとっては、今、パソコンができるようになることが、自己実現だと言えます。

社会に出てさまざまな問題に直面し、そのことから欲求へと発展する姿を受けとめる場の必要性を改めて感じた一場面でした。

(3) 学びから学び合いへ

生涯学習講座の参加者は、講師と受講生の関係の中で、受け身の姿勢で学んでいました。しかし、職場、年齢、地域、経験も違う参加者の集団の中で、他者との意見や考えの違いがあることも分かってきました。

また、グループワークやロールプレイを通して、お互いがさまざまな意見や考えがあることも学ぶようになりました。

自立への思いを強くもつOさんは、講座の中で積極的に発言をしたり、グループ討議でも中心になって意見を言ったりしました。しかし、他者からなかなか意見が出ないので、相手の意見や考えを詳しく聞いてみようと思ったそうです。

そこで、Oさんは「もう、少し詳しく話してもらえますか」「もうちょっと、説明してくれますか」と付け加えて聞くようにしたそうです。すると、周囲の人も話しやすくなったせいか、自分から「詳しく言うと・・・」「例えば・・・」と、説明を加えて話すようになってきました。Oさんは、他の人の話をよく聞くと、いろいろな考えがあることを知ったそうです。つまり、答えは、一つでなくても良いことに気が付いたそうです。

講師が小集団の話し合いを設ける中で、参加者が自分の考えを述べたり、他者の意見を聞いたりすることで、学び合いが行われます。

講座の中の集団討議による結論やまとめをつくっていく過程は、個々の意思や選択の尊重が大切です。同時に、納得や同意をしていくことも求められます。このように、集団による話し合いや意見交換は、講座を参加者同士で深め合う大切な時間にもなりました。

また、講座が進むにつれ、講師の話の内容に「私の・・・と一緒にですか」「それは、・・・(私のこんな経験と)と同じことですか」など、自分の知識や経験に結びつけた発言が出てきました。参加者が、講師の話に聞き入り、取り込む意欲に驚きを感じる講師もいました。講師から参加者への一方向になりがちな講座も、参加者から講師も学ぶ機会にもなり、双方の学び合いへと発展していきました。

(4) 自分の生活を築くために

今回の講座には健康生活、経済生活、食生活に関する内容がありました。学生時代は、生活費の面倒を見てもらい、食事もつくってもらい、健康管理も気遣ってくれる親の存在がありました。もちろん、参加者の大部分の人は、現在もその環境に近いと言えます。「自立の3つの場」について、現在の自分の環境をマップにしてみました。暮らしの場は「家族との暮らしによる家庭」、働く場は「会社や施設」、余暇活動は、サークル活動に参加をしている人、友達と過ごす人、一人か家族で遊ぶ人等、さまざまです。

しかし、「これからしてみたい生活」では、多くの参加者は、一人暮らしやグループホーム、結婚して好きな人と暮らすことを考えています。参加者の中

の、一人暮らしやグループホームで生活をしている人に、講座から学んで参考になったことを尋ねると、「病気になったとき不安だったが、体調管理や予防の方法を知ることができた」「無駄遣いをして、生活費が少なくなると心配なので、確かな（堅実な）生活をするために家計簿を付けたいと思った」「バランスの良い食事作りや食品の賢い選び方を学んだので、これからやってみよう」と生活の中で困り事や心配事の解消に役立てたい思いを発表してくれました。

私は、講座の学びを通して健康への予防や管理、お金の節約や儉約、食生活への関心と安全などへの意識の高まりを感じました。

1回ずつの講座では、それぞれのスキルや対処法、あるいは困ったときの支援の受け方まで学ぶことはできませんでした。今後、継続した生涯学習の機会が、知的障害者の自立生活をつくる場となることが求められていると言えます。

（5）学びの場から潤いの場が変わるとき

講座のなかで、一番、活気と笑顔のあふれるのが昼食休憩です。講座会場の近くは、商店街やコンビニ、スーパーなどさまざまな社会資源が豊富です。このような場所ですから、講座で知り合った仲間や、あるいは旧知の仲の友達同士で昼食を食べに行ったり、弁当を買いに行ったりしました。どの人も講座で見せる姿や表情とは別世界になります。会話も普段の自分の生活や仕事の様子、時には愚痴や悩みも聞こえてきました。あえて、立ち入って聞いていませんが。

このような時間は、講座の中ではつくれません。ある意味、学びの時間の合間に生まれた、ゆとりが醸し出す、潤いを感じる時間帯です。

知的障害者にとって、休日は「家で過ごす事が多い」「一人で遊んだり、家族と過ごしたりすることが多い」という結果がアンケート調査からも出ています。つまり、家と職場の往復による生活では、人間関係が広がらない上に、自分らしい休日の過ごし方や、職場の仲間や家族とは異なる人間関係を作る場が不足しているとも言えます。

すなわち、休日には楽しみや潤いを感じることができたり、気の許せる仲間と自分らしく過ごせたりできる場や機会をつくるのが、求められているのではないのでしょうか。そのためには、地域で自由な時間を豊かに過ごす生活の広げ方や、友達と楽しい時間の過ごし方の学習を講座の内容に位置づけて、本人達が自主的に余暇活動をつくり出す方法を身につけることも、大切な学びの一つであると言えます。

過去に、筆者は「こいこいクラブ」という障害青年のサークル活動の当事者運営を支援してきました。歳月を経る中で、ボランティア（支援者）が、サポーター（サッカーで言う12番目の選手）に、そして、同世代を生きる仲間の一人に変わっていく姿を感じた経験をもっています。しかし、仲間の一人でありながらも、支援者という一面ももつことも求められる存在でもあります。

余暇活動を集団的な活動として進めるには、本人達の意味や選択を尊重しつ

つ、周囲の意見や条件とも折り合いながら進める力も必要となります。そして、その活動を支えるボランティアの支援は重要です。つまり、支援をする側とされる側の立場を超えて、対等な人間関係を築く中で、当事者もサポーターも自治的な力量が備わってきます。

知的障害者の当事者運営による活動は、そのようなボランティアの関わり方により、潤いを感じる場となっていくます。そして、当事者と支援者が共に豊かな人間関係を築く人格発達の間にもなると思います。

生涯学習の取り組みが、このような発展をしていくことも期待しています。

2 講座を発展させるために

今回の講座は、助成金を財源としたモデル的な事業として運営が行われました。しかし生涯学習講座は、地域での活動として普遍化することが重要であると考えます。

また、そのための方策を明らかにすることも大切であると考えます。つまり、地域でも実践可能な学習プログラムを作成し、社会福祉サービスと結びついた事業として取り組むことが考えられます。

整理すれば次のようになります。

- (1) 参加者が期間限定ではなく継続的に利用できる。
- (2) 参加者が参加しやすい活動時間が確保されている。
- (3) 参加者の学習（活動）ニーズに応じたプログラムの準備をする。
- (4) 参加者の学習を生かす社会福祉サービスや社会資源などへのアプローチに発展させる。

第4章 生涯学習を地域で実現するために

1 全国で多様な広がりを見せる学びの場

(1) 知的障害者のオープンカレッジの取り組み

オープンカレッジとは、特別支援学校などの卒業生のニーズに対応できる生涯学習の場として、大学公開講座の中で取り込まれている活動です。複数の大学の連携や研究者の協力で行われている例もあります。

活動の内容はさまざまで、「生活」「労働」「余暇」「マナー・人間関係（人付き合い）」「自己理解」などの学習に軸を置いたものから、「文化」「スポーツ」「レクリエーション」などの楽しみや余暇活動に軸を置いたものまでいろいろです。

1995年から取り組みを続けている「オープンカレッジ東京」の取り組みでは、生涯発達支援と地域生活支援に視点を当てて、4つの生涯学習領域を導き出しました。

第1の「学習・余暇（学ぶ・楽しむ）領域」は、音楽、美術、運動などの活動です。第2の「自立生活（くらす）」は、清掃、洗濯、調理、整容、買い物外出などの活動です。第3の「作業・就労（はたらく）」は、就労に必

要な能力に関する学習です。第4の「コミュニケーション（人とかかわる）」は、人とのやりとりや要求、報告、連絡、相談のスキルや、社会生活に必要なコミュニケーションに関する学習です。

現在、オープンカレッジは、全国で25カ所(2005年3月)という報告がされています。

(2) 障害者自立支援法の福祉制度を活用した学びの場

障害者自立支援法を活用した実践例としては、2008年3月に和歌山県の「たなかの杜」に開設された、学ぶ作業所「フォレスクール」があります。地域で専攻科の設立運動を行ってきた「専攻科を考える会」と、その趣旨に理解を示した「ふたば福祉会」との連携により、事業化が進められました。運営の方法は、多機能型施設の中に、自立訓練事業の位置づけで高等部卒業後の学習の場として実現しました。

自立訓練事業（生活訓練）の対象者は、養護学校（特別支援学校）を卒業した人や地域生活への移行に支援を必要とする人です。標準利用期間を24カ月以内と定めており、多機能型の運営では6名以上の利用者が必要です。

自立訓練事業の内容は具体的には示されていないために、比較的活用範囲が広い事業となっています。例えば衣（服装、化粧、洗顔、裁縫、身だしなみ、おしゃれ）、食（調理、栄養、食事マナー）、住（掃除、洗濯、整理整頓、性教育、健康）、言語（あいさつ、マナー、電話、コミュニケーション、ソーシャル・スキルトレーニング）、経済（数量、電卓、買い物、パソコン）の指導が、月曜日から金曜日までの日課で行われています。

しかし、利用者の範囲と利用年数が限定されており、生涯学習環境として不特定の人々の継続的な利用が難しいという課題を抱えています。

（学びを主体とする自立訓練事業は、2011年度まで全国に9カ所設置されました）

2 生涯学習講座の実践を地域で広げるために

(1) 生涯学習講座のプログラムを活用した取り組み

今回、独立行政法人福祉医療機構の平成23年度社会福祉振興助成事業の助成金を受け、「特定非営利活動法人 エス・アイ・エヌ」の事業として開設に至ることができました。

生涯学習講座の実践を通して学習プログラムをつくることと、そのプログラムを地域で活用するために、社会福祉実践への活用を提案することが大きな目的でした。

生涯学習講座のプログラムに参加した人達は、企業就職をしている人が11人、就労継続型の施設サービスに通所している人が3人、就労移行支援型の施設サービスに通所している人が2人、地域活動支援事業に通所している人が5人でした。

一般就労をしている人にとっては、休日等を利用して生涯学習講座に参加で

きる条件や環境をつくることが大切になります。

また、施設に通所している人達にとっては、サービス内容の一部にこの生涯学習講座の内容を取り入れることが可能です。施設サービスから一般就労への移行や、グループホーム等から一人暮らしの移行への学習としても意味のあるプログラムであると思います。

そして、特別支援学校の高等部に通う生徒にとっては、卒業後の生活を視野に入れた学習プログラムとして、教育活動に組み入れることも可能ではないでしょうか。

このように、生涯学習の講座を構成するプログラムは、多様な場と機会をとらえて青年・成人期の自立を支える学びの講座として活用をすることが可能です。

さて、プログラムはできましたが、実際に運営をするためにはどのような方策があるかが大きな課題となります。実際に広島市で事業化をするための方策について紹介します。

(2) 広島で生涯学習の場をつくる

広島市の地域活動支援事業における地域活動支援センターの制度の一つにⅡ型と言われる制度があります。この制度は、事業目的を「機能訓練、社会適応訓練等、自立と生きがいを高めるための事業」としており、生涯学習の内容と共通する部分が多くあります。

また、事業としての利用人数に下限・上限の制限がなく、何人からの利用でも可能です。さらには利用日数・曜日にも制約がないために週に一度でも可能です。そして、利用日数に応じた日額単価です。事業の運営主体は比較的設立しやすいNPO法人でも可能で、もちろん社会福祉法人でも可能です。

このように地域活動支援センター事業のⅡ型は、生涯学習の場をつくるための有効な方策の一つとして十分意味があるといえます。

第5章 まとめ

1 生涯学習の意義

(1) 自分らしく豊かに生きるために

現代社会では、さまざまなアクセシビリティ（社会生活における情報やサービスなどの利用のしやすさ）が求められています。しかし、知的障害者の多くは、情報の活用やサービスの利用において自らの社会経験や家族、親しい人たちとの関係の中で、ものごとの判断や決断をしているのが実際ではないでしょうか。

私は、自分の生き方を主体的に決めたり、生活を切り開いたりする力を付けることは大切だと思います。そのために、必要な学びを支援する生涯学習に大きな意義を感じます。

生涯学習の場は、知的障害者が環境を活用して主体的に生きる力として、

活動の参加する方法を学び、意欲を培い、自分なりの主体を形成するために必要な環境の一つとも言えます。また、生涯学習は、人の生き方や人生に大きな影響を与えるものであるとも感じています。すなわち、自己実現に向けての支援であると共に、人格形成を高めていく支援になると考えています。

しかし、学校を卒業後に生涯学習の場が準備されている地域は、まだ少ないのが現状です。知的障害者が「自分らしく豊かに生きる」ためには、知識や視野を広げ、社会経験をさらに深めることで、新たな自分をつくりだしたり（人格発達の過程）、他者との関係を豊かに築いたり（集団のなかで）していくための、生涯を通じた学びの場が必要であると考えます。

（2）生涯学習で大切にしたい4つの視点

今回の生涯学習講座の取り組みを通して、実践から学んだことを次の4つの視点として以下のようにまとめました。

① 自己決定・自己選択の質を高める

知的障害による困難さは、本人の選択や決定を狭める要因としてあります。しかし、学校卒業後に重ねてきた社会人としての経験に、生涯学習による学習機会を生かすことで、自分にとってより良い選択、リスク回避というプラス効果が期待できます。

② 自己実現に向けた学び

目標や希望・夢をもち、その実現のために行動することは、学習意欲の高まりや継続の原動力となります。一方では、知的障害がある人は、自己実現するために、他者の支援を受けながら（依存的自立）その目標や希望を実現できる支援も併せて必要です。それは社会福祉サービスとの組み合わせにより実現が可能となると思います。そういった社会的支援を活用する力も学習の一つだと考えます。

③ 自立に向けて生活の質を高める

講座に参加した本人が「自分が知らないことが学べて良かった」「自立に向けて、少し自信がもてた」「他の人の話を、もっと聞きたい」「続けて、勉強したい」「もっと、いろいろな講座があれば楽しい」などの感想を述べています。

このことは、学習を通して、本人が感じたありのままの思いであり、学びへの強い要求が伝わってきます。つまり、学ぶことで変わりゆく自分を感じたり、学び合うことで、他者との関係を広げたりする姿からは、自らが自立に向けて、生活の質を積極的に高めようとしていることがうかがえます。

④ 学びあう集団の保障

講座の進行にあたり、集団討議やグループワークを取り入れた実践が多く見られました。集団の中で一つのテーマについて話し合うことで、自分と他者が向き合いながら、多様な考え方や意見から学んだり、あらためて、自分の思いや考えを確信したりするところに意味があります。

また、相手との違いを認め合ったり、見直しをしたりする過程を通して、他者との関係を豊かに築きながら、自分をつくっていく姿を感じます。

2 まとめ

(1) 生活に根ざした学びへ期待

講座への参加者の意欲や真摯さには、いつも感動を覚えることが多くありました。講師は、他でも講義をする経験のある人たちですが、参加者の熱心な学習姿勢には前向きな意欲を感じたそうです。講座への参加者は、就労やそのための支援を受けている人たちが大半です。学生時代とは違う、自分の就労や生活を背景にした切実な思いが、講師にも伝わってきたのではないのでしょうか。

参加者の多くは、日々の就労や生活に根差した要求やそれまでの経験に裏打ちされた願いがあります。そして、それらのことを解決したり、実現したりしたいと思う気持ちも強くもっています。そのことが学びへの意欲や熱意を生んでいるのではないかと思います。

私は、社会に出た後の経験が学びへの欲求につながっていると感じます。すなわち、学びへの欲求は自立をしたいと思う要求の表れであるとも思えるのです。

(2) 自立と生涯学習

知的障害者が自立を目指そうとすると、その実践を自分の意思に基づいて行うだけでは、障害による困難さにより自らの判断や選択を狭めたり、行動意欲を後退させたりすることがしばしば見受けられます。

自立を考えると、大切なことは知的障害者も健常者と同じように権利を行使でき、生活の不便さを解消し、その人の願いや希望の実現に向けて自らが進んでいけることではないでしょうか。

障害者の自立に関する考えの一つに「自助自立」を挙げる人もいます。しかし、私は「依存的自立」について意義を感じています。

「自助自立」とは、他人の力を借りずに生きるということの意味していますが、はたして、この世の中に他人の力を借りることなく生きている人はいるのでしょうか。私たちは生きていく過程で、たくさんの人に支えられて生活や仕事を成り立たせているのではないのでしょうか。

知的障害者のみならず、誰にとっても分からないことや難しいことを人に聞いたり、依頼をしたりすることができる力は、生きていく上で大切な力の一つであると考えます。

生涯学習は、より良い自己選択や意思決定を可能にしていくうえで、このような力の必要性に着目した取り組みであるとも言えます。

急速に発展する現代社会において、自立をめざす意欲を損なわないように、日々の生活をより良く生きていくために、そして、自分らしい人生を送るために大切なことは、社会生活や職業生活に必要な知識やスキルの獲得や、環

境や支援を活用していく力を高めることです。

より良い自己選択や意思決定を可能にしていくうえで、今後とも、微力ながら、知的障害者のための生涯学習環境の充実と推進に取り組んで参りたいと考えています。

《参考文献》

- ① 田中良三(2006)『障害児の教育年限の延長と今後の展望』障害者問題研究 Vol.34 No2 全国障害者問題研究会
- ② 全国専攻科研究会編(2008)『もっと勉強したい 障害青年の生活を豊かにする学びと「専攻科」』かもがわ出版
- ③ 渡部昭男(2009)『障がい青年の自分づくり』 株式会社日本標準
- ④ 松矢勝宏 監修 編著者 養護学校進路指導研究会(2004)『大学で学ぶ知的障害者』大揚社
- ⑤ 加藤直樹(1997)『障害者の自立と発達保障』全国障害者問題研究会出版部
- ⑥ 小林繁(2001)編著者『学びあう「障害」』クレイン
- ⑦ 大泉溥(1987)生活の主人公になる「生活と人格発達」人間発達研究所編全障研出版部
- ⑧ 上田敏(1992)「リハビリテーションを考える」青木書店
- ⑨ 國本真吾『障害者社会教育の現状と課題』～主体形成の社会教育論の視点から～(2002) SNE ジャーナル第8巻第1号(p118~p130)
- ⑩ 國本真吾 鳥取県における『オープンカレッジ「大学公開講座」の実践より』(2007) 障害者問題研究 Vol.35No1 全国障害者問題研究会
- ⑪ 奥野英子・関口恵美・佐々木葉子・大場龍男・興木栢・星野晴彦 (2006)『自立を支援する 社会生活力 プログラム・マニュアル』中央法規
- ⑫ 奥住秀幸・国分充・橋本真規・北島善夫(2008)『知的障害特別支援学校に通う高校生における卒業後の労働と余暇に対する意識』SNE ジャーナル第14巻第1号(p90~p107) 日本特別ニーズ教育学会
- ⑬ 草羽俊之(2004)『知的障害者の福祉サービスの相互支援システム』日本職業リハビリテーション学会 第32回大会発表要旨
- ⑭ 草羽俊之(2005)『就労と生活の自立を支える仕組み』職業リハビリテーション第18No.2,日本職業リハビリテーション学会
- ⑮ 上田 敏(2005)『ICF の理解と活用』萌文社
- ⑯ 石倉康次, 鈴木勉, 平野由子, 松田泰 編 (1998)『市民がつくった障害者プラン』(p141~p156)「豊かな自由時間と社会参加」北大路書房
- ⑰ 鈴木勉 編 『障害青年の自立と親の自立』(2004)クリエイツかもがわ
- ⑱ オープンカレッジ東京運営委員会 編集『知的障害者の生涯学習支援』社会福祉法人東京都社会福祉協議会
- ⑲ 國本真吾(2002)『障害者の社会教育・生涯学習施策の現状と課題』 鳥取短期大学研究紀要 第46号。
- ⑳ 草羽俊之(2011)「広島市における軽度知的障害者の自立を支える生涯学習の在り方の研究」日本福祉大学大学院修士論文